

3年前の秋、私は港区愛宕の東京慈恵会病院の入院棟から、日がな東京タワーを眺めていました。昼間のタワーは、既に色付いた足元の木々に包まれて少し寂しげな赤に、夜は冷たくなった空気の中で黄、オレンジ、紫赤のグラディエーションが冴えわたっています。珍しい感染症にかかって即入院から、辛い治療に息も絶え絶えの日々。



病院の窓からのタワー

ふと「もう、愛宕や三田のお山は色づいただろうか。」とつぶやく祖母の声が聞こえました。明治20年、皇后様を総裁に迎えた慈恵会病院に、祖母の父、私の曾祖父が赴任して、それからの約130年、わが家にはこの芝御成門の地が、ふるさとなったのです。戦災で焼け出された後も、小さな土地を買って戻りました。

この地での学校生活は歴史の彩ゆたかに、昔、日比谷から流れていた桜川にちなんだ小学校の友人宅（田村町）の玄関先には「浅野内匠頭、切腹地跡」の碑。近くの新生堂・切腹最中は、ミスした仕事のお詫びに伺う、手土産の必需品です。

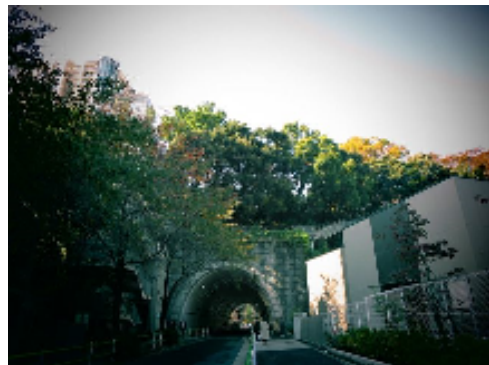
飯倉を經てお屋敷町三河台へと通った中・高校の辺りは、三島由紀夫の小説「春の雪」の舞台に。通学路の途中、鳥居坂にある日本銀行の分室では、巨大壱万円札型押しサブレ（ビスケット）を売っていて、聖徳太子、諭吉先生と、もう大人気でした。さて、御成門から増上寺境内を抜けて、弁天池の脇を赤羽根へ。ここを過ぎれば、我らが三田のお山の慶應義塾。今頃、大銀杏も色づいているかしら。福澤先生も勝海舟も杉田玄白も、この界限を気分良く歩いていたそう。



三田の大銀杏

おまけに勝海舟は級友の曾祖父様で、お顔立ちがソックリの美男美女に驚くばかり。

先日、久方ぶりの秋晴れに、病院の帰り、愛宕トンネルを抜けて山頂の神社にお参り。この愛宕山は東京23区で今も最高峰の標高25.7m、東京タワーが建つまでNHKはここからの放送でした。「桜田門外の変」の水戸藩士たちは、実行直前の集合をここで。急な男階段にはいつも恐れをなして、なだらかな女坂を下って日比谷通りを真っ直ぐに、戦前には広大な敷地を誇った徳川將軍家の靈廟・増上寺へ向かいます。



愛宕トンネル



愛宕神社おとこ階段

今は一箇所の霊家（おたまや）に集められ、身を寄せ合うように立っている歴代將軍達や和宮様、大奥のお局たちの墓石は、昔はそれぞれが独立した廟を持つ立派な建物群でした。周囲は蝶やトンボが飛び交う豊かな自然にあふれていたのです。

家康最高の政治顧問「以心崇伝和尚」の寺・金地院は、こんもりとした森で増上寺と繋がって、北東の位置から霊廟をお守りしています。崇伝は、大阪の陣の発端となった「国家安康」「君臣豊楽」の文字に難癖をつけた、あの策略家のお坊さんです。戦後この森が開かれて、昭和 33 年東京タワーが竣工した時、展望台から外階段を使って、地上に降りてきた小学生の私達は、つくづくと恐いもの知らずだったなあ。

さて明治以降、金地院の檀家になったわが家は、季節が巡るごとにお墓参りいたします。

目の前に立つタワーを、巨大な足元からはるか上方に見上げていますと、この塔が自分を守ってくれているような。ここには永い時間、懐かしい人々が常に身近に居てくれました。

入院中もタワーを眺めるだけで気分は穏やかに、不安な事などありません。いつの日か、この足元に静かに眠ればよいだけなのですから。心のたしかな抛り所、ふるさとの意味を、深くありがたく知ったことでした。わたしの美しい東京タワー、いつまでも！



タワーと増上寺